

利島村基本計画抜粋

東京都離島振興計画

(令和5年度～令和14年度)

素案

令和5年2月

東京都

2 利島基本計画

10年後の目標

利島の環境と調和しながら安心して住み続けられる生活基盤を作り、地域性豊かな産業振興と交流による活力ある産業基盤づくりを進めることで、将来世代にわたって持続可能な地域づくりを実践し「生き生きとした活力のある島 自立する村 利島」が実現されている。

- 交通については、漁港整備が進み、定期貨客船や高速ジェット船の就航率が向上することで、人流・物流が安定し、産業や住民生活における安心が確保されている。また、ヘリポート施設の更新がされ、ヘリコプターは、他の海路、空路と組み合わせられて多角的な交通ネットワーク化が図られ、本土や離島間の連絡がスムーズかつスピーディーになっている。
- 情報通信については、光ファイバーケーブルの強^カ靱化等が行われ、住民生活や各分野で高度情報通信ネットワークが広く活用されるとともに、医療、教育、農業、漁業、交通等の多分野でデジタル技術等を活用した地域課題解決が実践されている。
- 産業振興については、ワーケーション施設整備やワーキングホリデー受入等による島外人材との交流を通して、関係人口を創出することで労働力不足に対応し、島の基幹産業である椿産業及び漁業が維持・発展している。
- 生活環境整備については、安心した住環境整備のため、大型化する台風等の自然災害に対しても停電・通信障害が発生しない利島の実現に向けて、無電柱化を東京都と連携して実施するとともに、土砂災害に備えた擁壁設置などの防災施策が推進されている。また、再生可能エネルギーの活用を促進するとともに、空き家活用を含めた住宅施策を推進することで定住促進を図り、持続可能な村づくりが実現されている。
- 教育については、校舎・教職員住宅等の安全・安心の確保を前提としつつ、利島の環境を生かした最先端の教育活動が展開され、「十五の春」に向けた自立を目指す児童生徒と学び合う教職員が成長する場として学校が機能している。また、地域と学校が密に連携し、大人も子供も日々学びであられる村づくりが実現されている。

- 保健活動の充実や住民健診の全員参加を継続して推進することで島内の限られた医療・福祉機能と高額な医療費負担に対処している。加えて、デジタル技術を活用した島内診療所での専門診療の実施や相談体制の構築により本土との医療格差の是正が図られている。

島の現況・特色

【現況】

- 利島村は、北緯 34 度 32 分、東経 139 度 17 分、東京から南へ直線距離で約 140km の太平洋上に位置する円錐形の島で、周囲約 8km、面積 4.1k m²と東京都で一番面積の小さい村である。
- 島の地質は玄武岩で構成されており、外縁は永年にわたる侵食作用でできた海食崖（注 1）が 30～300m に及び、湾入部はなく、海岸は全て円礫の磯浜で形成されている。
（注 1）海食崖：波の侵食作用によってできた海岸の崖
- 島の中央には標高 508m の宮塚山がそびえ、集落は島の北西寄りの比較的斜度がなだらかな位置に集中している。
- 人口は、令和 4（2022）年 1 月現在 332 人、世帯数は 187 戸、高齢化率 22% となっている。平成 2（1990）年以降は人口 300 人前後を維持している。

【特色】

- 島全体の 8 割が油料用の樺の生産林で形成され、全国有数の樺油の生産地である。島の傾斜地は、全てひな壇状に造成され、約 20 万本ものヤブツバキが植林・管理されており、その生産林面積は 185ha にも及んでいる。
- 幼齢の樺林の林床には、健康食素材とされるアシタバや山菜として名高いモミジガサ（シドケ）、上布の原料となるカラムシ、世界最大のユリといわれるサクユリ等の植物が繁茂している。
- 周辺海域は、海底が岩礁から成ることから、伊勢海老、海藻類の磯根資源が豊かである。
- 長年にわたる伝統的な玉石積み文化が継承・発展されており、集落内の石垣は全て玉石垣で積み上げられ、調和のとれた美しい景観を見ることが可能である。

- 島内に寺社、小祠が多く存在することも特徴のひとつであり、歴史的資料が数多く現存している。
- 宮塚山や南ヶ山園地からは、伊豆半島、伊豆諸島の島々等の魅力的な景観の眺望が可能である。

島の課題

- 島民生活における他地域との交流玄関口として、人物・物流の拠点、漁業活動の拠点である利島港は、特に偏西風の強くなる冬季には定期船の接岸が困難となる。安定・確実に、船舶の就航を確保することのできる港湾整備は、離島で暮らす住民にとって生活の基本であり、最重要課題である。
- 防災情報を含め、生活の基幹インフラとなっている海底光ケーブルであるが、過去に断線した経緯がある。台風等による波浪の影響により再度断線する可能性が高い状態となっている。更には鳥獣等による被害や電柱の倒壊による被害が懸念される。
- 江戸時代に始まり発展を続け、現在も島の基幹産業である「椿産業」を取り巻く環境は、生産者の高齢化と後継者不足、椿林更新等の課題が山積している。
- 黒潮大蛇行の影響に伴い、海水温の高い状況が続いており、海藻類や貝類、伊勢海老などの主要海産物の漁獲が著しく減少し、漁業従事者の生活はひっ迫しており、新規漁法の検討や未利用魚の活用が必要である。
- 高校がない離島においては、中学卒業後に親元を離れた時の生活負担が大きく、今後1ターン移住者の島外流出が危惧されている。
- 人口の半数以上が1ターン移住者で構成されるとともに、地元住民の核家族化が進んでいることから深刻な住宅不足となっている。さらに住宅確保ができないことにより、公民共に慢性的な人材不足に陥り、島内の活性化の妨げとなっている。
- 人口減少が進む中、電気、水、し尿処理、ごみ焼却等のインフラ施設の維持コストについて、村民負担増加が懸念されており、再生可能エネルギーやデジタル技術等の導入による課題解決策について検討が必要となっている。

- 島内には国民健康保険診療所が 1 か所しかなく、総合診療科のみである。専門診療については一部の診療科が年間 1 回（数日）の診察しかない状況にある。専門診療を受診する際には、本土の医療機関を受診するしかなく、交通費や宿泊費等が発生するため、受診を控える傾向があり、健康寿命等が都内平均に比べ低い状況にある。
- 特に村道において道路が狭いので、高齢化した運転者の負担となっている。

目標達成への道筋

- 港湾整備を推進し、定期船の就航率を向上させることで、人流・物流の安定性を確保していく。
- 都道及び村道の電柱の地中化により、防災対策を強化していく。
- 高度情報通信ネットワークを活用し、各戸にタブレット端末を配布し防災や住民生活に必要な情報の発信を行っているが、更なる利便性向上に向けた機能拡充などを実施する。また、5G など超高速ブロードバンド設備を構築し、遠隔授業や医療等で活用する環境を確保していく。
- 島の景勝地を再整備し、観光客が利用するだけでなく、地域住民が日常的に利用するエリアとしていく。
- 出社を伴わない働き方が広がる中、このようなニーズに應えるため、島内の空き家を活用したワーケーション施設を整備し、当該施設における地域住民との交流を促進することで新たなつながりを創出していく。
- ワーキングホリデー等により多様な人材を巻き込み、新たな地域産業の在り方を創出していく。
- 再生可能エネルギー等を活用した住宅整備を進め、移住促進を図るとともに地域産業の担い手確保につなげることで持続可能な村づくりを行っていく。
- ごみ焼却施設の新設・除却を行い、ごみ焼却コストの低減化を図る。
- 島内の限られた医療・福祉機能と高額な医療費負担に対処するためにも保健・予防医療を徹底していく。保健活動の充実や住民健診の全員参加を継続推進していく。加えて、本土との医療格差の是正を図るために、デジタル技術を活用した島内診療所での専門診療

の実施や相談体制を構築するまでの間、島外医療機関への通院助成を行い、病気の早期発見、早期治療につなげていく。

- 充実した教育環境を整備するとともに、特色ある利島の教育を追求・発信することで、教育を通して利島の活力を創出する。
- 超小型モビリティを活用した、自動運転が可能な環境を確保していく。
- 避難所などの公共施設に、再生可能エネルギーを活用する設備を整備していく。

【利島型サステナブル住宅事業の取組】

○ 概要

移住者の増加・島民の核家族化が進み、深刻な住宅不足に陥り、住宅確保ができないことで公民共に慢性的な人員不足となり、島内の活性化の妨げとなっている。また、インフラ維持コストは増加の一途をたどっており、特に、河川や湧水のない利島では造水コストが高額となり、自治体財政を圧迫している。

住宅不足及び水資源不足解消等の課題解決に向け、再生可能エネルギーと水循環設備を導入した利島型サステナブル住宅の整備を進め、地域産業の担い手確保・移住者受入等による持続可能な村づくりを進めていく。

○ 具体的取組

再生可能エネルギーと水循環設備を備えたオフグリッド型トレーラーハウスを島内に設置し、利島型サステナブル住宅の実証を行っていく。実証を通じて、島民に対する水再生循環技術や安全性の理解を促進し、再生可能エネルギーや限られた資源の循環型利用設備を今後建設予定のサテライトオフィス、住宅等の公共施設に導入することで、サステナブルな利島を目指していく。